



中野亜里；遠藤 聡；小高 泰；玉置充子；増原綾子、『入門 東南アジア現代政治史』東京：福村出版，2010，263p.

清水一史；田村慶子；横山豪志（編著）。『東南アジア現代政治入門』京都：ミネルヴァ書房，2011，269p.

「東南アジア政治」を教えるというのは容易なことではない。第1に、東南アジアはきわめて多様な言語や宗教、人間集団を内包する地域であり、西欧や中東に見られるような共通の文化的土壌をもたない。西欧列強と日本の支配を受けたことはこの地域の（タイ以外の）国々にとって大きな共通点であるが、冷戦期のイデオロギー分断に示されるように、現代におけるその政治発展のありかたも多様である。これを概括して論じるには、相当な知識と体系立ての能力が必要となる。

第2に、日本の研究者（教育者）養成機関は、その知識や能力を身につけるためのシステムをもたない。東南アジア全体について学んだ後に研究対象国を選ぶコーネル大学などのシステムとは異なって、日本では大学院入学後まもなく対象国選びをする。その後は業績づくりと職さがしで懸命の日々となり、東南アジア地域の他国について知識を深めるゆとりをなかなかもてない。「東南アジア研究者」が集う学会では、自然と国ごとの仕切りができていくかのようで、他国関連の発表への質問や意見には、「専門外で恐縮ですが」という枕詞がつきものとなる。

このような事情を背負った「東南アジア研究者」たちは、大学で職を得るとすぐに、ある種の試練に立たされる。特別な場合を除いて、現在、大学の講義という場で求められているのは、インドネシアやタイ、ベトナムなど個別の国について延々と語るのではなく、東南アジアやアジアといった、より広くて「役に立ちそうな」対象についての知識を提供することである。この要請に応えるということは、「専門外」であった事柄を専門家として語るということにはほかならない。そこで、そ

の容易ではない仕事の実現のために、講義の進行と準備をサポートしてくれる教科書が探し求められることになる。

ありがたいことに、この2年ほどの間に相次いで2冊の東南アジア政治関連の教科書が出版された。ひとつは福村出版刊『入門 東南アジア現代政治史』、もうひとつはミネルヴァ書房刊『東南アジア現代政治入門』である。いずれも「入門」というように、初学者を読者として想定した本である。そして両者ともに、歴史的経緯をたどりながら東南アジア地域の政治を理解することを旨としている。サイズはいずれもA5判、前者はソフトカバー、後者はハードカバーの装丁で、価格はそれぞれ2,400円（+税）と3,000円（+税）である。

『入門 東南アジア現代政治史』は、3人のベトナム研究者を含む5人の共同執筆による。執筆分担が巻末に示されているが、分担執筆を感じさせないほどに全体の文章は簡素に均され、執筆者のクセや個性は排されている。いわゆる客観的事実のみをとりあげた概説といえる内容で、重要な人名や語句はゴシック体表記となっている。意図的であろうが、高校の歴史教科書と似た作りであり、内容的にもほとんど高校世界史の続編（東南アジア編）という位置づけで書かれたものであるようにみえる。

「はじめに」は、全体の構成と趣旨の説明である。前近代から東南アジア諸国独立まで（第I部）、冷戦下での建国の過程（第II部）、冷戦後の民主化と地域統合の状況（第III部）という時期区分と構成が示されるとともに、本書のねらいが次のように述べられている。「本書を通して東南アジアの政治を学ぶ人々には、この地域の事象を……歴史的背景から理解し、なぜ現状のようになったかを考えるセンスを養っていただきたい。また、東南アジアという地域レベルから世界全体を見つめ直す視角をもつようになっていただきたい。さらには、本書をきっかけに東南アジアと日本の関係に関心を持ち、自分たちの生活とこの地域のつながりを考えるようになっていただければ幸いです。」

「はじめに」に続く序章は、政治以外の事柄を扱っている。「東南アジア」が20世紀半ばに成立

した新しい概念であることを説明した後に、東南アジアの地形や気候、植生について案内を行っている。また、この地域の特徴ともいわれてきた文化の重層性（第1章で関連事項が詳述される）について導入的に触れている。政治史を知ろうとする前に、東南アジアの人々がどのような場所で、どのような価値観を抱いて暮らしているのかを知ることがとても重要である。講義者は、本章とともに、人々の暮らしの様子がわかる自前のスライドを見せながら話を進めると十分な「つかみ」が得られそうだ。

本論部分の内容は、大まかな流れを追うにとどめたい。第I部（1～4章）「東南アジアの近代——植民地化」は、中国や西欧の商船が行き交う前近代から話が始まる。伝統王朝による外来文化の受容が進む一方で、各地で独自の文化が育まれる過程が描かれる。そして話は、欧米列強による分割と植民地統治、植民地体制下におけるナショナリズムの展開へと進む。日本の東南アジア侵略とそれへの抵抗運動についても、現地の視点を重視しつつ要所がまとめられている。本パートのみならず本書全体を貫くスタイルとして、各トピックはその都度、国別のかたちで論じられている。偏りを避ける意味でこれは有効である。

第II部（5～9章）「独立と国家建設——冷戦の影響下で」は、独立とその後の国民国家建設について外的要因を重視するかたちでまとめられている。最初に、インドシナにおける冷戦構造の波及とベトナムの南北分断について記述がある。次に、インドシナ以外の諸国についても、それぞれどのようなかたちで独立が達成されたかが説明される。さらにインドシナ情勢の悪化とベトナム戦争に話題が進み、その一方で、インドシナ以外の諸国における国民国家建設の苦悩や、「開発独裁」とその成果がとりあげられる。最後に再びインドシナに戻り、中ソ対立を背景としたベトナム・カンボジア紛争の経緯をふり返る。東南アジア諸国の政治発展の多様性と、そのなかでの国民国家建設の苦悩という共通性が、さまざまな出来事の記述とともに示された内容である。

第III部（10～13章）「地域統合と民主化——新世紀の課題」は、ASEAN（東南アジア諸国連

合）の設立過程をまとめるとともに、この地域機構にインドシナ3国が加わるまでの過程を描いている。地域内の連帯の深まりを示す一方で、もうひとつの主題として民主化の波が各国を覆ってきた事実をとりあげている。この民主化の問題にどう取り組むかが、各国のみならず地域共同体としてのASEANの課題でもあるが、本書は最後に、そのことを含めてASEANの現状と可能性について触れている。前パートでおもに各国の政治発展の多様性が示されたのに対して、本パートでは、地域統合と民主化という共通課題をとりあげることによって、東南アジアという地域をひとまとまりに捉えることの意味を再確認するのである。

本文に関係するおもな資料として、巻頭に地図がある。本文中では、必要に応じて地図と写真が用いられ、おもに重要語句の説明としてコラムも20カ所以上にわたって設置されている。巻末には、略語一覧と東南アジア史年表、そして関連図書紹介が付いている。目を引くのは東南アジア史年表である。これは世界の動向（年表）を脇に並べて東南アジア各国の動向を記したものであり、「世界のなかの東南アジア」あるいは「東南アジアから見直す世界」を意図した本書ならではの配慮だといえる。

全体の評価としては、まず、事実への恣意的解釈が極力排除されており、押しつけがましさを感じさせないところがよい。構成もよく考えられている。類似書と比べるとインドシナ関連のページの割合が大きいのが、インドシナ以外の地域についても重要な事実は落とさずフォローされている。ASEANに多くのページを割いているのも妥当だと思う。中国の台頭が著しい現在、多くの日本人の目には東南アジアの国々の存在は霞んでおり、良くも悪しくもASEANが「東南アジア」を意識するきっかけとなることは確かだと考えられるからである。

最も評価したい点は、本書が、各国の政治を主題としつつ、終始それを国際政治の文脈の中で捉えようとしている方法である。「代理戦争」や経済開発はいわずもがなだが、たとえば国民統合の問題にしても、各国の内部事情のみから理解しようとするのは誤りである。インドネシアの例でい

ば、アジア・アフリカ会議の開催や非同盟運動、さらには西イリアン闘争、マレーシア対決と続くスカルノ時代の対外政策は、それが分裂する国内の結束を取り戻すために講じられたという点がとても重要である。冷戦や国際的な共産主義の展開をふまえずには理解の入り口に立つことすら難しいというのがこの時期の同国の政治なのである。そのように、国内政治を対外政策との絡みで考えるための材料を常に用意しているのが本書の良さであり、学生にとっては、政治を広く観察するための感性を磨く機会ともなろう。

以上、本書の長所をいくつかあげたが、本書はその簡素さゆえの短所も有している。ひと言でいうとそれは、読んでいて退屈だということである。高校の歴史教科書のおかげで歴史が好きになったという人がまれであると同様で、本書を読んだから東南アジアのことが好きになるという人も多くはあるまい。大国に翻弄され、内乱や戦争が長く続いた東南アジア諸国の政治史は、表現に工夫をしないと、悲惨であるとか後進的であるという印象のみをあたえやすいという事実にも注意を払う必要がある。

したがって、本書を教科書として自分の講義で使用する人たちは、独自のやりかたで味つけや肉づけを行う必要がある。方法はいろいろありそうだが、意味論的な視点の導入はそのひとつだろう。東南アジアの人々にとってそもそも政治とは何か、権力とは何か、外国とはどういう存在か、といった問題を折々にとりあげ、いわば文化（政治文化）の違いを提示するのである。それを通して、悲惨であるとか後進的であるという印象とはまったく別、東南アジア世界の興行きや楽しさを感じてもらおうということである。

たとえば、バニグノ・アキノ暗殺にはじまるフィリピンの2月革命がある。これを（マカティ・ビジネスクラブや民主野党連合を主役に立てて）政治経済的な視点から分析することはむろん可能である。しかしその一方で、2月革命の動力を生んだのは、アキノの死をイエス・キリストの死に重ね合わせて展開するフィリピン・カトリシズムの「物語」であったという見方もある。また、スハルト時代までのインドネシアにおける権

威主義体制の持続要因なども、話が膨らむテーマであろう。これについても政治経済的な説明は可能だが、その裏に存在していたといわれる意味論的要因、すなわち国家と社会におけるインドの王権概念の持続といった問題について触れてみてはどうか。そうした文化的アプローチをおもしろいと感じ、東南アジアの政治史により深い興味を抱く学生は少なくないと信じる。幸いにも、ここであげたような話をするための伏線や材料を、本書は、序章や第I部、文献紹介などで備えている。

本書は、講義のための道筋やペース配分を明示してくれる教科書である。独自の工夫による味つけは必要であるが、テキストから逸脱することなく講義を進められ、なおかつテキストを使いきる保証も見える。「はじめに」で示された3つのねらいは、やりかた次第で十分に達成可能である。値段も高すぎず、メイン・テキストとしてすぐにも使用してみたい本である。

『東南アジア現代政治入門』は、ブルネイを除く東南アジア10カ国とさらにASEANを1章ごとに扱ったもので、執筆者は各章1名の計11名である。九州の大学で教鞭をとる3人の研究者が、執筆者をかねた編者となっている。前近代と植民地時代に3割の紙幅をあてた『入門 東南アジア現代政治史』とは異なって、本書の1~11章が対象とするのは、独立ないしは独立前夜から現在までである。それ以前の歴史については、序章において駆け足で触れるにとどめている。本書の目的は、「現代東南アジア諸国の政治を、国民国家建設、民主化、経済発展などのプロセスと問題点、アジア経済危機のインパクトとその後の体制変動などを概観」し、また「発展から取り残された弱者にも配慮したものにする」（あとがき）ことだという。

最初に気がつく本書の特徴は、ブルネイが外れたとはいえ、ラオスやミャンマー、東ティモールなど、従来の入門書では周辺的位置にあった国々を、それぞれ1章の紙幅を割いて紹介している点である。もちろん他の諸国も同じ紙幅で扱っており、東南アジアのほぼすべての国を網羅したかたちとなっている。くわえて最後に、ASEANの成立と発展を扱った章が配置されている。

本書の工夫として目に留まるのは、各章のタイトルにその国の政治を理解するためのキーワードを用い、初学者のつかみを得ようとしている点である。インドネシア（第1章）は「多様性の中の統一」、マレーシア（第2章）は「民族の政治」、フィリピン（第3章）は「争われる民主主義」、シンガポール（第4章）は「超管理国家」、タイ（第5章）は「国王を元首とする民主主義」といったぐあいであり、ベトナム（第6章）、ラオス（第7章）、カンボジア（第8章）、ミャンマー（第9章）、東ティモール（第10章）の各章にも、それぞれ鍵となる語句を付している。

内容は、概ねどの章も高い水準にあるようにみえる。文章や言葉がこなれているということや、事実関係をめぐる誤謬が（管見のかぎりだが）見当たらないという点がまず重要である。意味論的視点をまじえて政治史や政治体制を論じたものもあり、おもしろく読める。各章の冒頭で「この章で学ぶこと」を明示するなど、散漫な学習にならないための配慮もある。また、各章の最後には、「本文では書けないエピソードや虐げられる人々の物語を入れることで、本文をより理解できるように」（あとがき）との目的で、読みごたえのあるコラム（写真付き）を配置している。本文にかかわる資料として、巻頭の地図と基本情報表（面積・人口・GDP）、巻末の東南アジア関連年表、本文挿入の表、各章ごとの文献紹介がある。全体にムダがなく、仕上がりのよい本だと思う。

しかしながら、本書は、大学の学部の講義で使用する教科書としては必ずしも適当とは言えないかもしれない。東南アジアの政治について——というよりも政治そのものについて——予備知識の少ない学生のためのテキストとしては、言葉づかいが高度すぎると感じる箇所が多い。漢字を多用しすぎていたり、フォントが小さめで余白が狭いといった視覚的な問題も、学生の教科書としてのマイナス要素である。

評者の勤め先で100人の学生を相手に講義を行う情景をシミュレートしてみると、一番の問題は本書の「構成」にある。本書は、半世紀をこえる東南アジア各国の現代政治史を、個別かつ順々に叙述するかたちをとっている。一見そこに不自然

さはないが、注意したいのは、各国の政治発展が多様であるとはいっても、それには限りがあるということだ。西欧列強の植民地支配、日本軍政、国民国家建設の苦悩と政治混乱、独裁政権の成立、経済開発、貧富の差の拡大、民主化運動と続く流れは多くの国が共有する。講義で本書を使用する場合、毎回、諸国が共有するこの流れ＝フォーマットを、学生の耳に慣れない固有名詞を埋め込みながら使っていくことになるだろう。ある国について20世紀中葉から話し始めて現在にたどりつき、次の週にはまた別の国の20世紀中葉に戻る。その反復は聴く側にとって少々つらいことかもしれない。聴く側がそう感じれば、話す側もへこたれてくる。

このように、本書を学部の教科書として使われるという確証はもてない。しかし、仮に大学院の演習向け教材としてみると、本書はかなり良好なテキストだといえるのではないか。たとえば、毎週報告者を替えて、ディスカッションの時間を多くとる。テキスト外の四方山話もどンドンするとよい。5週目をすぎたあたりから、学生たちは、東南アジアやその政治への興味を深め、比較の楽しさを味わうことになりそうだ。

（佐々木拓雄・久留米大学法学部）

小野林太郎、『海域世界の地域研究——海民と漁撈の民族考古学』地域研究叢書24。京都大学学術出版会、2011、524p.

本書は、著者が2005年に上智大学大学院外国語学研究科に提出した博士論文に、その後の調査の成果を組み入れ、加筆・修正したうえで刊行した、東南アジア海域世界を対象とする地域研究の著作である。中心的な考察の対象はセレベス海域である。セレベス海域とは、フィリピン・ミンダナオ島の南部、スルー諸島、マレーシア・サバ州の南東岸、インドネシア・スラウェシ島の北東部、サンギヘ・タラウド諸島の島嶼・沿岸からなる、セレベス海を中心とする地理空間を指している。セレベス海域は、更新世期（氷河期、約180万年前から約12000年前頃まで）にも大陸化せず、また更新世期から現在まで（旧）スンダ大陸と（旧）

サフル大陸の異なる生態圏をつなぐ海の遷移帯であり続けた。こうした地形形成史・生態史的な特徴を念頭において著者は、セレベス海域を東南アジア海域の人類史を理解するうえで独自の重要性を持つ小海域世界と位置づける。本書は、このセレベス海域の生業文化に関する自らの調査データの分析に、島嶼部東南アジアからオセアニアまでの生業文化に関する先行研究の知見を加え、東南アジア海域世界の地域像——特に「移動分散型社会」[鶴見 1987]という観点からみた地域像——を人類史的な時間幅で描き出そうとする、時空間双方の面でスケールの大きな地域研究の試みである。

副題に掲げられているように、方法論の軸は民族考古学であり、広義の海民の漁撈を中心とする生業文化が主な分析対象になっている。本書の民族考古学のアプローチは、具体的には、考古学的な発掘調査と民族誌的な臨地調査それぞれの成果を往還的に参照しながら、対象地域の生業・生活の基層を再構築しようとするものである。考察において中心的な位置を占めているのは、1999年から2010年までに、マレーシア・サバ州のセンボルナおよびインドネシア・北スラウェシ州のタラウド島それぞれにおいて著者自身が断続的に実施してきた、発掘調査と民族誌的調査に基づく分析である。

構成は、序章と本文7章に分けられている。序章では、まず東南アジア海域（世界）研究における問題の所在、海民等の鍵概念の定義、対象海域の特徴が示される。ついで、民族考古学の方法論的展開を整理したうえで、本書が「個別・歴史主義的な視点と法則・普遍主義的な視点」(p. 40)の双方を組み合わせた地域研究の立場から記されることが宣言される。第1章「現代セレベス海域の自然と人」は、対象地域の自然環境、民族、生業についての概説である。第2章「セレベス海域の生業文化と人類史」では、セレベス海域における自然資源利用の通史と人類の移住・拡散の過程が、この海域で人類の痕跡が認められるようになる約4万年前頃から、10～11世紀以降の「交易・植民地時代」に至るまでの5つの「画期」に分けて跡づけられる。

第3章「『沿岸漁撈システム』の形成——新石器時代のセレベス海民」は、本書の根幹をなす章である。この章では、まずセンボルナの新石器時代遺跡（約3500～2500年前頃）における自らの発掘調査の成果が綿密に分析・記述される。重点がおかれるのは、人類の生業と食生活の痕跡を示す海産動物の遺存体、特に魚骨の分析である。著者は、その分析結果に基づいて、セレベス海域では新石器時代までに、サンゴ礁資源の利用を基盤とした「沿岸漁撈システム」と呼ぶ生業様式が確立されていたことを明らかにする。第4章「『沿岸漁撈システムの発展』——金属器～植民地時代のセレベス海民」では、タラウド島における発掘調査と先行研究によりながら、金属器時代（約2000～1000年前頃）から植民地時代までのセレベス海域と東南アジア海域における、生業様式の持続と変化が跡づけられる。

第5章「現代サマの漁撈——近代以降における漁撈戦略の様相」は、本書のもうひとつの根幹をなす章である。ここでは、現在のセンボルナの漁民を対象とする生態人類学的な調査に基づいて、かれらの漁撈活動の基本部分が高新石器時代にはじまる「沿岸漁撈システム」と共通していることが指摘される。第6章「漁撈のインポリューション？——近現代のセレベス海民」では、近代以降（国民国家の成立後）のセレベス海域における海産資源利用と生業様式の発展が辿られ、漁具漁法の精緻化（＝「インポリューション」）と、操業規模の大型化・漁場の拡大という二つのベクトルで類型化される。

結論部にあたる第7章「漁撈からみた東南アジア海域世界の海域像」では、前章までの議論をもとに、セレベス海域と東南アジア海域における生業文化の発展過程が人類史的な時間幅で再検討される。その作業からまず導かれるのは、セレベス海域の生業文化が高新石器時代に確立された「沿岸漁撈システム」を基層としてきたという、本書の骨子をなす理解である。ついで、自然資源利用と生業戦略に焦点をおいて地域像を捉えなおした場合、現代のセレベス海域を含む東南アジア海域世界の「移動分散型社会」としての性格は、新石器時代にはすでに顕在化しはじめていたとする推論

がまとめられる。最後には、東南アジアの他の「マイクロな小海域世界」との比較をふまえ、セレベス海域は、サンゴ礁が卓越する沿岸の海洋生態への適応を果たした人々が、外洋深海などの異なる海洋生態に向かうための技術や知識を蓄積した海域、いわば人類の海洋生態への適応過程における「階段の踊り場」[鶴見 1990] だったのではないかと推論的に結んでいる。

さて、これまでの紹介からも明らかなように、本書のきわだった特徴は、対象としている時間の幅の長さにある。具体的な考察にかかわる部分だけでも、その時間の幅は、新石器時代から現代までの約 4000 年に及ぶ。さらに全体の議論では、約 4 万年にわたる東南アジア海域の人類史が視野におかれている。ただし、このように長大な時間を扱う一方で、著者は、発掘調査と臨地調査双方の定量的な分析を土台にして、きわめて実証的にセレベス海域の地域像を探っている。著者はまた、民族考古学における「民族誌的類推法」の限界をふまえ、「純粋に生態環境や技術的による制約を受け、それゆえにより普遍的側面が強いと考えられる生業活動」(p. 41) に分析の対象を限定することをあらかじめ明示し、その限定のもとでセレベス海域および東南アジア海域の人類史を跡づけている。本書のアプローチの壮大さ、方法論の独自性は、個々の分析・考察がこうした学問的厳密さのもとで展開されていることとあわせて、評価されなければならない。

ついで本書の論点にかかわる意義についていえば、それはなにより、セレベス海域の基層的な生業様式を「沿岸漁撈システム」として概念化し、同システムの連続性と展開をいま述べたような人類史的なスパンで実証的に跡づけたことと、そのうえで、人類の移動と海洋生態への適応に目を向けて、東南アジア海域世界におけるセレベス海域の人類史的な位置づけを示したことにある。その議論の基盤をなす緻密な分析と考察は、東南アジア海域世界の生成・再編にかかわる様々な分野の研究に独自の影響を与えることになるだろう。

他方で、いま述べたような独自性の高さに起因するのかもしれないが、本書には、分析概念や議論の展開、構成などに関して問題と思われる箇所

もいくつかあった。ここでは二点、短く指摘しておく。第一の問題は、考察の軸をなす概念についてである。本書では、鶴見良行 [1987] が提唱した「移動分散型社会」や、田中耕司 [1999] が論じた「フロンティア」等の概念が、東南アジア海域の地域像を再検討するための鍵概念として援用されている。これらの概念は、しかしながら、主に「交易・植民地時代」以降の東南アジアの社会文化動態を理解するために用いられた概念であり、新石器時代の分析をひとつの軸とする本書の人類史的な考察に適用するときには、著者自身によるそれらの整理ないし再定義が不可欠である。「移動分散型社会」や「フロンティア」をめぐる議論、特に結論部における議論がやや曖昧になってしまっている理由のひとつは、その作業が欠如していたからであると思われる。他に、地理的な概念としての○○海域と、地域研究における地域概念としての○○海域世界が、全体を通して明確に区別されずに用いられていることも気になった。

第二の問題は、本書でいう「交易・植民地時代」、つまり文字資料が利用可能になる時代の扱い方にある。この時代の東南アジア海域については、豊富な先行研究の蓄積がある。本書も、漁撈や交易、海民の移動にかかわる断片的な記述については広く文献を参照している。しかし、それらのあり方を特徴づけた時代区分や地域枠組みに関する先行研究の議論 (たとえば Kathirithamby-Wells and Villiers [1990] や Ptak and Rothermund [1991]) には、ほとんど注意を向けていない。そのため本書からは、この時代の海民の生業経済や移動の動態の側面、それらの変化の具体的な文脈がみえてこなかった。「交易・植民地時代」の記述 (第 4 章の後半部と第 7 章の一部) は、独立した章を設けて体系的にまとめたほうが良かった、というのが評者の印象である。

以上、若干の問題点を付記したが、これらはもとより本書の中心的な価値にかかわるものではない。本書の一義的な価値は、東南アジア海域研究の系譜に人類史という斬新な視点を接合し、その学問的な射程と可能性を大きく広げたことにある。

(長津一史・東洋大学社会学部)

引用文献

- 田中耕司. 1999. 「東南アジアのフロンティア論にむけて——開拓論からのアプローチ」『〈総合的地域研究〉を求めて——東南アジア像を手がかりに』坪内良博（編），75-102 ページ所収. 京都：京都大学学術出版会.
- 鶴見良行. 1987. 『海道の社会史——東南アジア多島海の人びと』東京：朝日新聞社.
- . 1990. 『ナマコの眼』東京：筑摩書房.
- Kathirithamby-Wells, J.; and Villiers, John, eds. 1990. *The Southeast Asian Port and Polity: Rise and Demise*. Singapore: Singapore University Press.
- Ptak, Roderich; and Rothermund, Dietmar, eds. 1991. *Emporia, Commodities, and Entrepreneurs in Asian Maritime Trade, C. 1400-1750*. Stuttgart: Steiner Verlag.
- 王柳蘭『越境を生きる雲南系ムスリム——北タイにおける共生とネットワーク』京都：昭和堂，2011，404p.

はじめに

民族誌的な作品の魅力は、細部の記述にある。インフォーマントの生の声や、人びとの行動の観察記録などは、私たちの想像力をかきたて、私たちを未知なる世界に引き込む。しかし他方で、作品が細部の記述に終始すれば、人類学的な分析としての価値は半減する。仔細な民族誌的データに忠実になれば、分析の枠組みが不安定になり、逆に分析の枠組みを堅固なものにすれば、民族誌的面白みを犠牲にすることになりかねない。本書は、そうした困難な試みに果敢に取り組んだ、良質の民族誌的作品だ。

同時に本書は資料的価値をも有する。50年後、100年後に誰かが、北タイの雲南人コミュニティで調査をするにしても、本書はそれら未来の研究者たちに重要な資料を提供するであろう。本書に収録された詳細な語りや民族誌的記録の隅々に、私たちは新たな発見、新たな価値を見出す。まず

は本書の民族誌的データをもとに、全体を貫くキーワードである「越境」と「共生」にこだわりながら、本書の内容を私の言葉で要約したい。

本書の構成と内容

本書は第1章から第7章、および終章の、合計八つの章から構成されている。第1章から第7章までのタイトルと内容は以下のとおり。

第1章 目的と方法

第1章では、本書の目的と調査対象の紹介、それに先行研究などが示される。理論的な枠組みとして、従来の移民、越境研究を批判的に検討し直し、同化論などから、ディアスポラ論などへ続く系譜を整理する。そのうえで、「地域歴史的なコンテキストに依拠しつつ、かつ国境内外をめぐるネットワークによる多面的な生存戦略から移民の生きる地域と民族間の動態をその地に生きる人びとの視点にそって実証的に明らかにする事例研究ははじまったばかりである」(p.16)として、「移民と地域との関係性を重視し、移民によってどのように地域が創出されるのか」(p.3)を解明することを、移民研究の新たな課題として提示する。

第2章 タイへの越境と集落形成の歴史的展開

第2章では、北タイにおける雲南人集落の地理的分布と歴史的形成過程が紹介される。本章前半で紹介される北タイの雲南人集落の地理的データは、集落の地理的位置から民族構成、人口規模に至るまで、資料的価値が極めて高い。後半部分では「難民村」の歴史的形成過程を、回想録や伝記を基に再構成する。「難民村」を構成する母体となった「国民党軍という組織」が、「移動過程で多様な民族を吸収して再組織された雑部隊」(p.49)であったこと、「雲南人の中で民族性はさしたる集合的意味を帯びて」おらず、「回や漢といった民族的な背景は自他を区別するうえで」(p.58)重要性を有していなかったことが示される。また、そもそも「雲南人側から見れば、この時期の北タイ国境というのは、国と国を隔てる分断線としては強く認識されて」おらず、「ビルマ軍からの攻撃を逃

れることができるシェルターであり、身を隠すことができる安全空間として認識されていた」(p. 54)。国民国家の境界は「越境」により無化され、雲南系ムスリムと雲南系漢人との「民族」的な違いも「越境」される。

第3章 雲南系漢人の越境経験と重層的ネットワーク

第3章では、「難民村」に居住する雲南系漢人のライフストーリーが紹介される。「戦乱、経済的困難、軍事的移動など、多岐にわたる」要因によって、「北タイ国境地域に住む雲南人は一層多様になり、移動ルートも複雑化した」(p. 93)。彼ら彼女らの移住の歴史とルートはあまりにも複雑で多様であり、そのため安易なモデル化は許されず、事例はあくまで個別のストーリーとして提示される。それでも、彼ら彼女らの移住史に通底するものがあるとすれば、やはり「越境」と「共生」の実践である。「中国生まれの雲南人であれ、ビルマの雲南人であれ、彼らはタイ国内での定住先が見つかるまで、雲南人集落の間、場合によっては山地民族の集落も足場にして、移動を繰り返す。こうした移動を支える前提として不可欠なのが、家族、親族といった個人レベルから国民党軍といった軍事組織にいたるまでのネットワークである」(p. 123)。民族や軍属身分の境界は、様々なネットワークを駆使して乗り越えられ、人々は「共生」する。

第4章 雲南系ムスリムの越境経験と交易の変容

第4章から雲南系ムスリムの移住経験に関する記述が始まる。前章で紹介された雲南系漢人と異なり、雲南系ムスリムの北タイへの移住は、100年以上の歴史を有する。初期の北タイへの移住者は、交易の過程で北タイを来訪し、定住した人々である。他方、20世紀半ば以降の雲南系ムスリムの移住は、「雲南系漢人の移住時期とほぼ重なっている」(p. 165)が、しかし彼らのなかには「越境過程において引きつづき交易活動を行っていた人たちが含まれ」「19世紀末に雲南とタイの間の地域間交易に従事していた雲南系ムスリムの延長線上にある」(p. 165)。ただし、「20世紀後半にお

ける雲南系ムスリムの中国からの移動は、彼らが従来依拠していた交易活動とはかならずしも結びつかず、「移動パターンにも変化と多様化」(p. 141)をもたらした。

第5章 タイ国家のなかの雲南人——排除と強まる規制

第5章では、国家が法制度上雲南人をいかに扱ったのかが、法の条文の分析を通して明らかにされる。タイ国家の移民政策、国籍付与政策、共産党対策などの中で、国民党の軍人や家族、民間の商人などが翻弄された様子が的確に描写される。

第6章 民族関係とイスラーム・ネットワークの展開

第6章では、大多数の漢人に囲まれて生きる雲南系ムスリムが、漢人やその他の人々との間で「どのような関係性と生存戦略をもったの」(p. 211)かが分析される。本章の重要な論点は、「難民村」から都市部への再移住である。都市部への再移住は、雲南系漢人と雲南系ムスリムの混住状況から、雲南系ムスリム独自の地区への移行を意味する。「難民村」では、「回教徒も漢人も関係なく」(p. 212)、軍事組織下にいたのに対して、チェンマイ都市部へ移住した雲南系ムスリムたちは、雲南系モスクの周囲に集住し、漢人からもインド・パキスタン系ムスリムからも差異化される。都市部におけるエスニック・コミュニティの産出という、近代都市エスニシティ論の系譜を忠実に再現しているかに見える。しかし、もちろん実体はそれほど単純ではない。

著者は、ある雲南系モスクとそれに付随するイスラーム学校の建設に際して集められた寄付金について、チェンマイ市内にある二つの雲南系ムスリム教区を比較する。サンバコイ教区から集められた寄付金は、雲南系ムスリムからのものが約67%、それ以外が約33%である。他方、バーン・ホー教区からの寄付金は、約90%が雲南系ムスリムからであり、それ以外は約10%に過ぎない。「難民村」からの再移住者を受け入れた二つの雲南系ムスリム地区が、異なる性質を有していることを示している。

第7章 国境の華人社会

雲南人と中華世界との結びつきを扱うのが第7章であるが、ここでも「難民村」と都市部の雲南系ムスリム地区とが比較される。「難民村」においては、雲南系漢人/雲南系ムスリムを問わず、台湾との結びつきが強い。国民党軍を中心に成立した「難民村」には、台湾の政府や慈善団体から多額の資金や援助物資が届き、中国語教育、日常生活など多くの部分で台湾から支援の手が差し伸べられたからである。「台湾は……精神的にはより身近な場」となり、「中国語という語学力を身につけた雲南人二世は、台湾で経済的に活躍する機会を求めて、出稼ぎに行く」(p. 297-298)。

他方で、「都市部バーン・ホー・モスクの雲南ムスリムたちは、台湾よりはむしろ中国とのつながりを重視している」(p. 298)。とは言え、都市の雲南系ムスリムを取り巻く環境は、中国との間の単純な関係のみでない。都市部のバーン・ホー・モスクで企画された、雲南省騰冲県のモスク落成式ツアーに参加した著者は、そこで北タイと中国という単線的な結びつきを越えた、より広いネットワークの存在を見る。騰冲県のモスクの再建のために集められた寄付金には、タイのみではなく、ミャンマーや台湾からのものも含まれていた。北タイと中華世界との関係は、益々複雑化している。

コメントと疑問

このように、本書は雲南ムスリムの移住をミクロな視点から仔細に分析した良質の民族誌的作品であり、資料的価値も十分に有している。本書の民族誌的水準は十分に評価されるべきことは間違いない。しかし、書評者に与えられた責任は、本書の内容を紹介し、著者の弛まぬ努力に称賛を与えるだけではないのかも知れぬ。コメントや疑問をわずかでも提示しておくことも重要な責務であろう。以下では、「越境」と「共生」について、1点のみ簡単なコメントを提示しておきたい。

本書を貫くキーワードである「越境」と「共生」は、ともに差異を前提としたタームである。越境するためには、境界が存在せねばならない。共生するためには、他者が存在せねばならない。境界

や他者という差異が存在してはじめて意味をなす言葉である。しかし、本当に明確で、本質的な差異が存在しているのか。越境や共生という語を提示したとたん、まるで私たちの眼前には越えられねばならない深い境界や、大きな差異が存在しているかのように見えてしまうのではないか。著者は終章で、「漢人/ムスリムといった弁別は、個人や集団をカテゴライズするうえで固定的なものではなく」(p.326)と指摘しているにも拘わらず、一貫して雲南系漢人と雲南系ムスリムの「民族的な違いを、北タイ雲南人社会における本源的な差異を生み出す出発点としているように見える。

本書で使用されている「民族」が何を指しているのか、本書を最後まで読みとおしても判然としなかったのだが、それは「民族」という語が指示しているものが極めて流動的に記述されているのに対して、分析の部分においてはリジッドな存在として提示されているからである。「民族」が違うということについて、本書はどのようにとらえているのかが分らなくなるのが、入信ムスリムの事例である。第3章事例5の周氏(p.90)は入信ムスリムであるが、この個所では雲南系漢人という「民族」の事例として紹介されている。同様に、第4章の田氏(p.152)も入信ムスリムであるが、こちらでは雲南系ムスリムという「民族」の事例として紹介されている。入信後の移住と移住後の入信という違いだろうか。あるいは、著者が研究を始めるきっかけとなった、雲南系ムスリムと雲南系漢人の言葉を思い出してみよう。「雲南系ムスリム男性は『雲南の回族も漢族と同じで中国人ですよ。宗教が違うだけだからね。』「さらに彼らは口をそろえて自分たちは『雲南人』だと主張した」(p.31)。こうした生の声の細部を大切にしたい。

いずれにせよ、「越境」や「共生」という言葉を意味あるものにする差異はいずこから生じるのか。その点をより深く分析することで、移民と「越境」、移民と「共生」をめぐる理論的考察が可能になると思う。そして、本書にはそれを可能にする貴重な民族誌的データが豊富に掲載されている。

おわりに

最後に、本書のタイトルについて一言述べておきたい。本書のタイトルは『越境を生きる雲南系ムスリム』である。しかし、本書において雲南系ムスリムについて十分に記述されているのは、第4章と第6章、それに第7章の1節のみであり、それ以外の部分では、基本的に雲南系漢人もしくは北タイの雲南人全般の移住や定住に焦点が当てられて記述されている。本書が雲南系ムスリムと雲南系漢人を比較しながら分析を進めていることを考えると、こうした本書の構成には一定の理解を示し得る。しかし、タイトルは書物の内容を一言で表しているはずだ。もう少し工夫してもよかつたのではないか。重箱の隅をつつくような指摘で恐縮だが、一言付しておきたい。

(木村 自・大阪大学大学院人間科学研究科)

平井京之介、『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経験』東京：NTT出版、2011、257p.

「工場」「東南アジア女性」「近代化」——タイトルに示されたキーワードを目にし、本書を現代の東南アジア版女工哀史であろうと想定した読者はいないだろうか。否、本書はグローバル資本主義の支配関係に取り込まれた女性労働者を扱った「工場のエスノグラフィ」(p.7)ではあるが、その内容は女工哀史ではない。本書は、タイ北部工業団地にある工場で働く若い女性たちに焦点をあわせ、労働によってもたらされた近代性がタイ農村社会のなかでどのように受容されたのかを論じた民族誌である。

本書のアプローチの特徴は、近代的な工場労働に否応なく巻き込まれていく女性の姿を、工場のみならず、農村における家庭生活との連続した時間のなかで捉えたことである。著者は、チェンマイ近郊の工業団地にある日系企業の工場で働きながら、同工場員である女性の家に同居し、工場と農村の双方で参与観察やインタビュー調査を行った。そして、そのデータに基づいて、女性たちが伝統的価値観へ恭順を示しながら近代的な工場労働

に適応し、なおかつ家庭生活を創造的に再編成していく様を描き出している。そのことによって、既存の東南アジアにおける女性工場労働者の研究が、「搾取」を画一的な概念として無批判に前提としており、生活者としての女性たちが何を基準に搾取と認め、抵抗する/しないのかという地域の視点を見過ごしてきたことを浮き彫りにした。以下、章立てに沿って本書を要約した後、本書の議論が東南アジアにおける女性労働論に対して提起する問題を示し、評者のコメントとしたい。

「工場のエスノグラフィ」は、農村における伝統的な仕事観や行動パターンの記述から始まる(第1章)。北タイ農村において「仕事」(*ngan*)とは、農業や賃金労働、家の中の仕事(料理や掃除、洗濯、裁縫、育児や介護、健康管理、家族関係の維持を含む)、および儀礼などの活動であり、それらは「経済活動というよりは社会活動なのであって、他の社会関係から独立したものとして考えられていない」(p.27-28)。稲刈り時の雇用取引の事例では、雇用主はこれまでに付き合いのある近親者や隣人、友人らを、長期的でより親密な相互扶助的関係を見据えたうえで、労働者として「請う」。雇用者は、報酬が支払われるにもかかわらず、助けてくれる者として思いやりの気持ちをもって雇われ、食事などのもてなしを受ける。両者は、作業テンポを駆け引きしながら作業全体の秩序を維持する、あるいはゴシップで互いの行動を統制しながら作業することで、より親密な関係を築いていく。

続いて舞台は工場へと移り、北タイ農村女性たちが、上司や同僚との相互行為においても伝統的な農村社会の仕事観を用いながら工場労働に適応していく姿が論じられる(第2章、第3章)。舞台となる工場は、プラスチック製文具の下請け製造工場で、労働者の8割が組立課に所属し、組織の末端に属する組立作業専門の労働者(オペレーター)は全員が女性である。工場内では、労働者と日本人社長、およびマネージャーとの間で直接会話はなされない。業務命令は、タイ人マネージャーや課責任者を介して伝わり、問題発生時も労働者間でのみやり取りが行われる。労働者の採用も課責任者に一任され、現従業員と親族関係に

ある者の定着率が高いことから、採用に関して親族ネットワークの有無が重要視される。また、タイ人同士であっても、職位の差から優越感を持つ事務員に対して、労働者は敵意を抱き、伝統的なジェンダー価値観に反する性的なゴシップを広めることで抵抗している。それによって、固定的な階層性を一時的に転覆させ、自尊心を取り戻すためである。

組立課の労働者の職位は、上からマネージャー、チーフ、スタッフ、リーダー、オペレーターとなっている。リーダーと15~20人程度のオペレーターが一つの班を構成し、通常は二班で一つの組立てラインを担当する。オペレーターは、日本人マネージャーによって細分化された組立過程とノルマを与えられ、各班リーダーの監視下で単純な流れ作業を行う。ただし、与えられたノルマとは別に、同僚間の標準的な実績数が暗黙のうちに設定されており、各人がそのペースに同調することが求められる。リーダーは、それを黙認したうえで、作業実績を調整して上に報告する。しかし、オペレーター間に相互扶助は生まれない。仕事にのめり込まない、あるいは互いの作業に干渉し、相手の能力不足を指摘してしまうことを避けるという戦術によって、代替可能な単純労働者である自身や同僚の自尊心を維持しているという。

さて、本書が北タイ農村における女性労働者の「厚い記述」になっているのは、工場での労働過程以外の場面をも分析対象としているためである(第4章)。若い女性労働者たちは、隣人や親族ではなく、工場で知り合った気の合う同僚間でグループを形成し、休憩時間や終業後、休日などの余暇をともに過ごす。著者は、彼女らが休憩時間に繰り広げるおしゃべりのなかで人気のある三つの話題「ロマンチックな語り」「霊媒カルト」「カタログ販売」を取り上げ、これらの話題が「タン・サマイ (*than samai*)」と表現される「モダンな」ライフスタイルを想起させる行為や願望とつながっていると指摘する。タン・サマイとは、「『最新の』、あるいは『モダンな』という意味」であり、「服装や振る舞い、活動、雰囲気、そして人そのものについてこのことが用いられる。たとえば、最新の化粧品、セクシーな服装、人気のレ

ストランでの食事、デパートでのショッピング、人気のバーでの飲酒などがタン・サマイといわれる」(p.170)。著者は、こうしたタン・サマイという語がもつローカルな意味に注目し、タン・サマイな振る舞いとして女性労働者たちが想定する行為が、農村社会における伝統的な規範からの逸脱を正当化する機能を持つと同時に、文化的伝統の自明性を意識的、反省的に捉え直すきっかけにもなっているという。

そして本書の舞台は、再び農村へと戻る(第5章)。著者によれば、農村出身女性たちは、近隣の工場で働くことによって、安定した収入や移動の自由を獲得した。未婚者の場合は、休日にも家庭外で同僚と過ごし、恋愛および結婚相手を自分で選ぶことに積極的になったという。その結果、工場労働者が性道徳的に不道徳であるというイメージが流布し、工場で働く妻の行動を管理する夫も現れ始めた。しかし著者は、女性たちが働き始めて家庭での時間が減少したからといって、家庭内で女性に期待される役割までが減少したわけではないと論じる。むしろ彼女たちは、仕事と家庭での役割を両立させるべく時間を組織化し、夫や両親と交渉し、経済的合理性を計算するようになり、収入の大半を家庭に入れ、「家を化粧する (*taeng hyan*)」ことに精を出すようになった。まずは自分の家を建て、タン・サマイなライフスタイルを象徴する家電製品や家具を揃え、盛大な新築祝い儀礼をする。そうした実践が、主婦としての誇りを示す指標として、親族や隣人に評価されるからである。自らを化粧することに精を出すのは、家庭での責任を果たした後になる。

終章では、女性たちが工場労働を通して経験するタン・サマイという概念に基づく日常的な実践が、もうひとつの近代性のプロセスとして改めて論じられる。女性たちは、近代的な工場のシステムが一方向的に要求する行動様式を身に付けるのではなく、相互扶助や名誉の感覚を行動原理としながら農村社会の慣習的な実践を用いて労働に適応し、家庭生活をも変容させていた。そして、自らが代替可能な労働力であることを認識し、工場では戦術として自尊心を維持することに尽力しながらも、家庭生活では労働によって「自由になった」

「地位が向上した」(p. 225-226)と考えていた。ただし著者は、このような選択的な自由の享受は、農村女性が商業主義文化やグローバルな資本主義システムに対して周縁的な地位に組み込まれるプロセスでもあったと結論付けている。

経済的な条件が異なるので他地域との無条件な比較はできないが、本書からは、既存研究が労働にともなう東南アジア女性の多面的な実践を、「搾取」される対象として一元化してきたのではないか、という問題が改めて見えてくる。既存研究は、特定の活動や行為が「生産労働か家事労働か」というおそらく当事者レベルには存在しない問いを立てることで、どこの地域でも家内領域が市場化された労働空間から完全に切り離されているかのように扱ってきた。そして、両方を対立した概念として提示することで、論理上、女性労働は必ず二重性を帯び、労働市場において周縁化されるという構造的問題に自ら陥ってきた〔中谷 2003: 156〕。

北タイ農村の状況は、生活基盤を奪われ、低賃金で過酷な労働を強いられる地域と比べると特殊な環境かもしれない。農村地帯に位置する工業団地が常に労働力不足の状態で、「社会経済的条件によって命令に従う必然性が乏しい」(p. 217)という地域的特性から、女性たちは生存基盤を確保したうえで求職や転職には困らない。その意味では、先進国企業による東南アジア女性への無情な搾取を明らかにしてきた従来のフェミニスト的研究と本書を安易に比較することは躊躇される。しかし、環境の違いを十分踏まえたうえで比較するなら、本書は女性労働者の生活世界が工場でのみ完結しているのではなく、余暇や家庭生活と連続した時間のなかにあるという単純な事実と真摯に向き合い、仕事・労働をめぐる多面的な問題を地域特有の概念によって浮き彫りにしたと言えよう。

最後に、評者の問題関心から本書の課題をあえて挙げれば、本書の主題である労働を通じた女性の近代化経験が、北タイ農村社会全体におけるジェンダーの問題とどのような関係にあるのか、という疑問が残る。もちろん本書の主旨がそこにはないのは重々承知だが、女性工場労働者の近代化経験が及ぼす文化変容、特に家庭生活への影響を

明らかにするのであれば、現代北タイ女性の労働のあり方と農村社会における様々なジェンダー規範(たとえば祖霊信仰や儀礼に見られる母系のイデオロギー、財産分与や相続、親の扶養における女性の優先)がいかに関わっているのかという議論を本書で積極的に論じる必要があったのではないだろうか。著者も第4章と第5章でタン・サマイな行為と関わる範囲で個別に若干の考察をしているが、労働に関するオルタナティブな視座とは対照的に、ジェンダーに関しては伝統的な価値観とタン・サマイな価値観のどちらかに振り分けられたままである。グローバルな資本主義システムに接合していく過程で、北タイ農村社会での労働は、どのように女性(あるいは男性)の役割としてジェンダー化され、権力性を帯びて階層化していくのか。また、そもそも労働の場と家庭生活の場はいかに区別されているのか、特に著者の議論から垣間見える労働をも含み込んだ家内領域は、その外部といかに区別されているのか、という点こそが仕事・労働を通じた東南アジア女性の近代化経験から導き出されるオルタナティブな価値観であるとも考えることもできるのではないだろうか。

(木曾恵子・京都大学東南アジア研究所)

参考文献

中谷文美. 2003. 『「女の仕事」のエスノグラフィ——バリ島の布・儀礼・ジェンダー』京都：世界思想社。

新谷忠彦；クリスチャン・ダニエルス；園江 満(編)『(アジア文化叢書) タイ文化圏の中のラオス——物質文化・言語・民族』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所歴史・民俗叢書Ⅶ. 東京：慶友社, 2009, 401p.

国民国家を単位とした歴史叙述への批判が高まって久しい。かつて古田元夫は、歴史研究が対象とする「地域」とは固定的なものではなく、歴史家が課題意識に応じて設定する可変的なものであるとする「方法としての地域」という見方を提

示した [古田 1998]。本書もまた、複合文化交流圏としての「タイ文化圏」を設定することで国民国家「ラオス」を単位とした歴史研究を相対化し、従来「辺境」として扱われてきたラオス北部地域の国境を越えた文化交流の歴史の実像に迫ろうという、意欲的かつ野心的な試みとなっている。

「タイ文化圏」は、地理的には中国西南部からインドのアッサム地方にかけて四角形に広がる広大なタイ系民族の居住区域を指す。本書はその一部を成すラオス北部地域に焦点を当てたものである。ラオスでは 1975 年まで国内を二分しての内戦が続き、革命後もラオス人民革命党の厳しい統制のもと、外国人研究者がフィールド調査を行うのが困難な状況にあった。近年、フィールド調査に対する規制は緩和されたが、インフラの未整備などの理由により今なお国内での調査は容易ではない。本書はこのような状況のなか、各著者がラオス北部地域において実施してきた調査の結果に基づき、執筆されたものである。

本書に先立つこと 11 年、本書の編者の 1 人である新谷が編者となり『黄金の四角地帯——シャン文化圏の歴史・言語・民族』が出版されている [新谷 1998]。『黄金の四角地帯』におさめられたのは言語学と歴史学を専門とする著者たちの論稿であったが、その続編といえる本書ではさらに民族考古学、農学、文化人類学など多分野の研究者が加わり、本書の性格をより学際的なものとしている。「シャン文化圏」から「タイ文化圏」への名称変更については、第 9 章で新谷が「シャン文化圏」ではビルマのシャン州が中心の文化圏との誤解を受けかねないとの懸念があった、とその理由を説明している (p. 383)。

タイ系民族の共通性については 19 世紀末にチェンマイを中心にラオス、中国南部などで布教活動を実施した、アメリカ人宣教師ウィリアム・クリフトン・ドッド (William Clifton Dodd) が *The Tai Race* を著すなど、古くから関心をもたれてきた。本書の新しさは、この地域をとおしてみられる共通性をタイ系民族に限定されたものとせず、非タイ系民族をもふくめた複合文化交流圏としての「タイ文化圏」を提唱したことにある。いずれも綿密なフィールド調査にもとづいた本書の論稿

は、すべてが非常に高い資料的価値を有する世界的にみても貴重な研究といえることができる。

本書は、以下の 9 章から構成されている。

- 第 1 章 地域としてのラオス北部 (園江 満・中松万由美)
- 第 2 章 雲南人 (ホー) のボンサーリー史——山地民を統治した傅一族の事例を通して (クリスチャン・ダニエルス)
- 第 3 章 言語と民族 (新谷忠彦・加藤高志)
- 第 4 章 ラオス北部におけるタイ・ルー——サイニャブプリー県における移住史と守護霊儀式を中心に (馬場雄司)
- 第 5 章 ラオス北部におけるタイ・ヤンとクムの関係——生産システムの観点から (富田晋介)
- 第 6 章 農具と農耕技術が描く「タイ文化圏」 (園江 満)
- 第 7 章 鉄器文化の交わる場所——鍛冶技術からみるラオス北部 (神野 信)
- 第 8 章 水牛の利用と互酬性——ラオス北部タイ系農村の事例を中心に (高井康弘)
- 第 9 章 タイ文化圏研究の今後 (新谷忠彦)

第 1 章では、ラオス全土を地勢、気候、人口・民族分布、稲作の側面から検討し、タイ文化圏に属するラオス北部が中・南部とは異なる文化的基層を有することが示唆される。第 2 章では、ボンサーリー県に居住する雲南人の事例をとおして、ラオス近現代史とタイ文化圏における山地民の歴史的役割が検討される。ラオス内戦史研究ではバテート・ラオ勢力における山地民族の活躍が指摘されてきたが、実証的な研究はほとんどなされていないのが現状であった。本章では、中立派のカムアン・ブッパー大佐が中国・ベトナムとの連携を深めつつボンサーリーで社会主義政策を進める過程に、山地民が取り込まれていく様子が描き出される。第 3 章では、著者らが 1996～99 年にかけてボンサーリー県を中心に実施した言語調査の結果得られた科学的データに基づき、ラオス北部の言語状況が示される。このなかには、著者らにより初めて言語学的記述が行われた言語が多数含ま

れ、危機言語の存在も指摘されている。第4章では、著者のフィールド調査をとおして明らかとなったラオス北部、サイニャブーリー県を中心とするタイ・ルーの移住史と守護霊儀礼の実態と歴史の変遷が詳細に描かれる。第5章では従来、「水田-水源涵養林システム」と「焼畑-休閑林システム」という2つの生産システムの担い手（前者がタイ系民族、後者が主としてモン・クメール系の山地民）の間には支配・被支配関係があるとされてきたのに対し、民族間に明確な階層関係のない事例が示される。著者は2つの生産システムにおけるコメの生産量に注目し、後者の生産環境においても余剰米が生産され、コメを外部依存する必要がなかったことから山地民が自立性を維持することができたと結論付けている。第6章では、犁を中心とする耕具に焦点を当て、農具と水田耕作技術からラオス北部の稲作の様子を概観し、この地域における多民族間の文化的・技術的交流が検討される。そしてラオス北部では、水田稲作民とされてきたタイ系民族の間でも水田稲作が陸稲栽培の技術的な基盤の上に、生産量の安定を図る手段として成立したとの推測が示される。第7章では、ラオス北部における鍛冶技術の現状から、この地域の鉄器生産や技術の接触・需要の在り方とその背景について考察がなされる。第8章では、水稲作、焼畑耕作との相互連関の中での水牛の利用や水牛に関係する儀礼に焦点をあてることで、ラオス北部における人と水牛の関わりが多面的に検討される。第9章では編者の一人である新谷によって、「タイ文化圏」研究のこれまでの足跡が総括され、今後の研究課題として言語調査の継続やタイ系言語による文献の収集、整理、解説などとともに、大河川流域文化圏を念頭においた調査の必要性が指摘される。

このほか、各章の間にはモン族の食習慣（安井清子）やフアパン県での歴史調査（増原善之）など各論稿に関連する6つのコラムが挿入されている。そして本書をとおして「タイ系言語をリングフランカとしながらも、多言語、多民族であって一つの伝統に支配されるのではなく、さまざまな文化的要素を持ちながら、それらを有機的に結びつけている何らかのゆるやかなシステム」（p.1）

が存在する複合文化交流圏としての「タイ文化圏」の姿が描きだされるのである。

以上のような内容を持つ本書が素晴らしい研究書であることは疑いの余地がない。それは第一に、すべての論稿が地道なフィールド調査と科学的なデータに裏付けられた高い資料的価値を持つものであるということにある。また、国境地域をタイ文化圏の越境的な関連性からとらえ直そうという問題意識が全著者に共有され、論文集としての完成度も高いものとなっている。本書は「複合文化交流圏としてのタイ文化圏」という枠組みの正当性を、説得力をもって読者に提示することにほぼ成功しているといえるだろう。

しかし一方で、全く不満が残らなかったわけではない。ひとつは、国家との関係についてである。新谷によると、著者らがもっとも重視したのは「物事全てを先入観や偏見を持たずに率直に観察する」ことであるという（p.384）。とりわけ、国境という先入観を取り払うことが強調されている。しかし、このことを意識するあまり、国家の影響力を過小評価しているような印象を受ける箇所が見受けられる。第9章で新谷は「こうした文化圏の中に国境線を設けて、人、物、カネの移動を合法的に行おうとする国家権力の意図とは裏腹に、伝統的なバイパスルートを使った非合法的な移動がなくなる気配はまったくなく、国境線とは関係のない民族間の有機的な関係は今尚健在である」と述べている（p.385）。たしかに、本書をとおして現在も続く越境的な民族間交流の事例が多数示されている。しかし国境地域は国防上重要な地域であり、国家権力の介入と無関係であり続けることは難しい。とくに、現在ラオス政府は市場経済化を進める一方で、「貧困削減」の名のもとに農村・山岳地域に対する管理強化を図っており、今後国境を越えた移動に国家権力の統制が強まる可能性は否定できない。本書においても第4章で馬場が、1990年代にサイニャブーリー県で守護霊儀礼が禁止された背景に、国境を越えて親族が集まる儀礼に対する、政府の懸念を指摘している。こうした事実を鑑みれば、今後国家の介入によりこの地域の越境的交流に何らかの変化が生まれることは

不可避といえ、上記の新谷の言葉は少々楽観的にすぎるように思われる。

もうひとつは、本書の先駆性を思えば過ぎた要求になるのかもしれないが「タイ文化圏」の中の諸民族の関係についてである。本書の新しさが非タイ系民族をも含めた越境的な複合文化交流圏である「タイ文化圏」を設定した点にあることは先に述べた。たしかに鍛冶技術や農具・農法の分布などについての詳細な記述から「タイ文化圏」の諸民族間になんらかの交流関係が存在することが浮き彫りとなる。しかしながら、そうした交流の背後にどのような歴史的関係性を読み取ることができるのか、必ずしも十分な分析がなされていないように思われた。たとえば新谷は第9章で「社会的な側面から見れば、タイ系民族は非タイ系『民族』を自らの社会の中に組み込んで、それぞれに何らかの社会的な役割を持たせていることが見て取れる」(p.385)としているが、非タイ系民族の視点から見た場合はどうであるのか。彼らがタイ系民族から何を取り入れ、何を取り入れなかったのか、さまざまな技術交流の背後にある、この地域の諸民族間の階層関係や政治的動態が学際的に明らかにされていくことを期待したい。そうすることで、マーティン・スチュアート・フォックス(Martin Stuart-Fox)ら、ラオス研究者によって繰り返されてきたタイ系・非タイ系民族間に支配・被支配関係があるとする「定説」に何らかの見直しを迫る可能性があるのみならず(本書第5章で富田が試みている)[Stuart-Fox 1998]、山地民研究にも新たな視点を提供できるものと考えられる。

最後に、本書をとおして非常に残念であったのが、誤字・脱字、表・節番号の誤りなど、校正の

不徹底に起因する誤植が散見されたことである。貴重なデータが網羅された良書であるだけに、この点が大変におしまれる。

以上、いくつかの問題点を指摘したが、それでもなお本書が高い学術的価値を有する良書であることには変わりない。星野龍夫は1990年に出版された著書のなかで、タイ諸族の言語文化研究について「我々の言語データでは特にめぼしいものと言え、ベトナム、ラオスの戦争難民の集落や個人からしか得られなかった。すべてのエリアを現代言語学的手法で現地で記述することなど、everybody's dreamであったし、いまだにそうである」と述べている[星野 1990: 57]。本書の研究はかつてのeverybody's dreamがもはや夢ではないことを明確に示すものとなった。著者らの今後の研究の発展を期待してやまない。

(矢野順子・東京外国語大学・上智大学)

参考文献

- 新谷忠彦(編). 1998. 『(アジア文化叢書) 黄金の四角地帯——シャン文化圏の歴史・言語・民族』東京外国語大学アジア・アフリカ研究所歴史・民俗叢書Ⅱ. 東京: 慶友社.
- 古田元夫. 1998. 「地域区分論——つくられる地域, こわされる地域」『岩波講座世界歴史1 世界史へのアプローチ』樺山紘一; 川北 稔; 岸本美緒他(編). 東京: 岩波書店.
- 星野龍夫. 1990. 『濁流と満月——タイ民族史への招待』東京: 弘文堂.
- Stuart-Fox, Martin. 1998. *The Lao Kingdom of Lan Xang: Rise and Decline*. Bangkok: White Lotus.